

[市民公開講座]

心に生きる日野原重明先生

—30年余の豊かな学び、そして未来—

柳田 邦男

ノンフィクション作家

日野原重明先生とはじめてお会いしたのは、1980年11月第4回日本死の臨床研究会が東京で開かれた時でした。先生は69歳、私44歳でした。先生は25歳も人生の先輩でした。

がんが進行して死が避け難くなった患者に対し、医療者はどうかかわるべきか、何ができるかという問題意識から、1977年に先駆的な医療関係によって設立された死の臨床研究会の取り組みに、私は強く関心を抱き、その第4回が東京で開かれたことから、全プログラムに参加して、講演や研究発表に耳を傾けたのでした。

そのプログラムの1つに、日野原先生の「延命の医学から^{いのち}生命を与えるケアへ」と題する講演があった。その時が先生の講演を聴いたはじめてのことであり、講演後には、はじめてお会いしてごあいさつをさせて頂いた。

なぜごあいさつをしたか、その理由は、先生の講演がご自分の内面をさらけ出すような内容だったので、非常に心を打たれたからだった。京都大学医学部を卒業して医師となり、最初に受け持った若い女性の患者が死期が近いことを自覚して、日野原医師に遠くに住む母への別れとお詫びの伝言を頼んだのだが、先生はその願いを受け止めずに、あなたは元気になるのですから、そんなことをお母様に言う必要はないですと嘘を言って、その患者の最後の願いを無にしてしまったのだ。

治療の失敗ではない。患者の心の深層を理解できなかった失敗を、自分のあるべき医師人生の原点として、40年以上経っても大事にして講演で赤裸々に語るといふ先生の姿勢に、私は感動したのだった。

それから逝去されるまでの30数年、折々に対談をしたり、会合や会議でお会いしたりする機会を数え切れないほど持つことができた。

そうしたおつきあいの中で学ばせて頂いたことを、次の項目に沿って話してみたい。

- (1) 日野原先生の患者からの学び方 特に失敗したことからの内省について
- (2) 先生の人格形成の原点について (3) 留学(米国)先での学びの視野の広さ
- (4) 先人哲学者の言葉を自らのものに吸収する咀嚼法について
 - ・ソクラテス「医師もまた言葉を使う人である」「死についてはよく知らぬのだから、それを悪しきものとして怖れる必要はなく、むしろ善いことかもしれない」
 - ・ハイデガー「山々の連なる山並みの、最高の山脈として、人間存在の最後の死があるのだ」
 - ・マルティン・ブーバー「いくつになっても創めることを忘れない」
- (5) ウィリアム・オスラーへの傾倒 (6) 死生観と医のあり方 (7) 長寿の背景要因を考える

—以上—

【プロフィール】

柳田 邦男 (やなぎだ・くにお)

1936年、栃木県生まれ。NHK記者を経てノンフィクション作家に。72年、『マッハの恐怖』で第3回大宅壮一ノンフィクション賞、79年、『ガン回廊の朝』で第1回講談社ノンフィクション賞、95年、『犠牲(サクリファイス) わが息子・脳死の11日』とノンフィクション・ジャンルの確立への貢献で、第43回菊池寛賞を受賞。災害・事故・公害問題や、生と死、言葉と心の危機、子どもの人格形成とメディア等の問題について積極的に発言している。